

# 翻訳シフト論の潮流と社会記号論からのメタ理論的総括

Trends of Translation Shift Theories and Their Metatheoretical Overview from Social Semiotics

河原 清志

Kiyoshi KAWAHARA

## 1. はじめに

本稿は翻訳に不可避的につきまとう原文テキストと翻訳テキストの齟齬ないズレ（シフト）に関するこれまでの研究の潮流を示し、旧套の諸理論を批評しつつ、社会記号論から総括することを目的とするものである。

翻訳シフトとは、「起点テキストを目標テキストに翻訳するとき起きる小さな言語的变化」と定義される (Catford, 1965; Munday, 2008/2012)。これは翻訳シフトのうち言語的側面に特化した定義であると言えるが、言語によって何を文法項目とし、何を文法項目としないか、あるいはそもそも言語により何を言語化し、何を言語化しないかについて相違があり、これが翻訳に付随する「損失と付加 (loss and gain)」(Bassnett, 2002) となって現れる。これはヤコブソンの言葉を借りると (わかりやすいので英語のままで記すと)、“Languages differ essentially in what they must convey and not in what they may convey.” (Jakobson, 1959/2004) となる。そこで、翻訳において (一般的な意味での) 言語的等価を実現しようとする時、この “what they must convey” という部分で二言語間の言語構造上の違いにより義務的な翻訳シフトが生じ、“what they may convey” の部分で任意的 (選

択的) な翻訳シフト、つまり個々の翻訳者にある程度委ねられた裁量によって翻訳実践のあり方がズレを生じることになる (cf. van den Broeck & Lefevere, 1979; Toury, 1980; van Leuven-Zwart, 1989)。

また、これは翻訳行為に対する社会文化的制約の観点ともある程度パラレルである。Toury (1995/2012) は翻訳規範を効力 (potency) の観点から捉えなおし、一方の極に絶対的規則 (absolute rules) が存し、他方の極に純粋な特異性 (pure idiosyncrasies) が存しており、翻訳規範はこの両極の連続体 (cline) の中間に位置するとした。絶対的規則は義務的シフトに、特異性は任意的シフトに対応すると考えられる。

以上から、翻訳の言語的側面、社会行為的側面の両面において、義務的にシフトが生じる極と、翻訳者の個性として任意にシフトを生じさせる極とがあり、これらが翻訳者の意識/無意識の反映となって現れる、という立論が可能となるだろう。では、これまでの翻訳シフトについての議論を見てみたい。

## 2. これまでの翻訳シフト論とその批評

(1) J.C. キャトフォード (1965年)

J.C. キャトフォードは1965年の *A linguistic*

*theory of translation*で、翻訳シフトを初めて提唱した。先述のように翻訳シフトとは「起点テキストを目標テキストに翻訳するとき起きる小さな言語的变化である」としたのはキャトフォードである (Catford, 1965)。彼は、形式的対応とテキストの等価という比較軸を立てる。これは、同書の「翻訳等価」の章で、「一方で翻訳等価は、起点テキストと目標テキストの比較によって発見される経験的な現象であり、他方で翻訳等価の基礎となる条件ないし正当な理由」があり、この2つを「区別しなければならない」としており (Catford, 1965, p. 27)、この経験的な現象としての等価を目に見える形で分析可能にするための概念装置としてこの2つの用語を導入していると思われる。しかし、この用語がすっきりしないので換言して説明するならば、形式的対応とはラングレレベル (抽象的な言語構造のレベル) での二言語間の対応関係を見るもので、テキストの等価はパロールレベル (具体的な発話・談話レベル) での当該二言語テキストの対応関係を見るものである。形式的対応では、ラングレレベルで語、句、節などの対応関係を形式的に見る。これは言語形式のみに着目して起点言語と目標言語の対応関係を個別に見ていくものである。他方、テキスト的等価は「等価」、つまり「意味」に着目し、起点テキストと目標テキストの意味がどのように対応しているかを見るものである。そして、形式的対応とテキスト的等価とのズレがまさにシフトとなって現れる、と考えている。同書の「翻訳シフト」の章で、「『シフト』という言葉によって意味しているのは、起点言語から目標言語へと向かう過程のなかで形式的対応から離れていくことである」としている (Catford, 1965, p. 73)。

注目に値するのは、同書の「翻訳：定義と一般類型」の章で、翻訳のランクという概念

を導入していることである。ランクとは翻訳等価が構築される際の文法的 (または音韻的) 階層に位置づけられるものであり、具体的には、文、節、句、語群、単語、形態素という階層をなす言語単位のことである。このランクという考え方によると、従来の「自由訳 (free translation)」「直訳 (literal translation)」「逐語訳 (word-for-word translation)」は次のように規定できる。自由訳はランクの拘束がなく、時として文も超えて自由に訳す場合。逐語訳は「語のランク」に拘束された翻訳。そして直訳はこの極端な両者の間に位置するものである、としている (Catford, 1965, pp. 24-25)。彼はこのシフトには大きく2種類があるとしている。詳細は以下のとおりである。

- ①レベルのシフト：起点言語のある言語レベルのある項目が目標言語で異なったレベルで翻訳等価物を有する場合。具体的には、例えば一方の言語では文法で表現され、他方の言語では語彙によって表現される場合。(彼は「レベル」という概念を、音韻論と書記素論、文法と語彙をそれぞれ異なったレベルと措定し、上述した「翻訳等価の基礎となる条件ないし正当な理由」としての「実体 (substance)」としている。そしてこのレベル間でシフトすることを、レベルのシフトと呼んでいる。)
- ②カテゴリーのシフト：翻訳における形式的対応からの離脱。これには4つのタイプがある (ここではわかりやすく、キャトフォードの説明を換言して記す)。
  - (a) 構造のシフト：ほとんどの場合、文法構造のシフトを指す。
  - (b) クラスのシフト：品詞転換、品詞のシフトを指す。
  - (c) ランクのシフト：上述のランク (階層的

な言語単位) のシフトを指す。

- (d) 体系内シフト：ラング間では起点言語と目標言語が対応する言語体系の文法項目を有しているにも拘らず、翻訳において目標言語での訳語選択の場面では、起点言語とは異なった言葉を選ぶ場合を指す。例えば、英語にもフランス語にも名詞には単複形があるが、英語の advice (単数形) を仏訳すると des conseils (複数形) となるような場合である。

キャトフォードを総括すると、翻訳研究の科学的アプローチを初めて意識した研究で、当時の機械翻訳への関心の高まりと相俟って、言語テキストのみに焦点を当てたものと言える。したがって、形式的対応とテキストの等価という比較軸を立て、これを一貫させた論として展開した。しかしながらこれは静的な構造レベル、ラングレレベルでの対照言語学的性格を有していること、機能・状況・文化などのコミュニケーション行為としての翻訳の特徴を等閑視していること、分析例が自ら作例した理想化されたテキストを対象にしていることなど、ファースやハリデーの言語学的モデルに依拠していると言いつつ (同書1章)、ある意味で生成文法を翻訳研究に応用しようとした E. ナイダと同じ轍を踏んでいると言わざるを得ない。翻訳研究は本来的にパロールの研究であるからである。

また、もう少し細かく見ていくと、キャトフォードの枠組みは、形式的対応とテキストの等価という比較軸のみに基づいた分析であるので、対応関係や起点=目標テキスト間の形式的なズレは論じているが、それがどのようなズレなのかという内実について、意味論や文法論からの議論がなされていない。しかも、文法のシフトの議論も、一部ヒンズー語、日本語、ナバホ語、シンド語などの若干例は

取り上げているが、明らかに主要な西洋言語を念頭に置いてなされている。さらには、センテンスレベルの議論に収斂しているため、センテンスを超えた情報構造のレベルなどの議論もなされていない。このように、批判点も多い翻訳理論である点は否めない。

しかしながら、キャトフォードはそれ以降の本格的な翻訳理論の礎になるような提言も行っている。「翻訳等価が確保されるようにするには、起点テキストと目標テキストが状況内で機能的に関連した特徴に結びついたものでなければならない」(傍点は筆者。原文はイタリック体) と言い (Catford, 1965, p. 94)、ある種の機能的等価の概念を打ち出している。また、「翻訳不可能性」の言語面と文化面について、言語テキスト分析に依拠した論を若干展開していること (同書14章)、13章「翻訳における言語の多様性」で下位言語 (sub-languages) ないし変種 (varieties) について論及し、言語は全体論として語ることは操作的に有益ではなく、個人語、方言、言語使用域、スタイル、モードによって等価のあり方も異なることを示唆した点は、大いに評価されよう。

- (2) 1960-70年代のチェコスロバキア：J. レヴィー、F. ミコ、A. ポボヴィッチ

1960-70年代、(当時) チェコスロバキア (現・スロバキア) では文体に関する翻訳シフトの議論が展開した。まずレヴィーは1963年の *Umění překladu* で、詩の翻訳を中心に文芸翻訳の美的効果を目的とする等価について論じている。等価を達成させるべきテキストの特徴を分類している。指示的意味、暗示的意味、文体的布置、シンタックス、音の繰り返し (リズムなど)、母音の長さ、音の明瞭度、である。これらが翻訳で重要になるかどうかはテキストタイプによるとしている (マンデ

イ, 2009, pp. 96-97)。

またレヴィーは、1967年（英語の翻訳は2000年）の*Translation as a Decision Making*では、目的論的な見地から翻訳を実践的な語用論的行為と捉え、翻訳者による訳語選択の漸次的変化のあり方をゲーム理論と関連付けて、次のように論じている。

翻訳理論は規範的になりがちで、翻訳者に最適な解決策に従うように指示をしがちである。しかしながら、実際の翻訳業務は実践論（語用論）的なものであり、翻訳者は最少の努力で最大の効果を約束してくれる選択肢から1つを決断して解決策を得る。つまり、直観的にいわばミニマックス方略を選択するのである。(Levy, 1967/2000, p. 156)

同じくチェコスロバキアのココは1970年の‘*La théorie de l’expression et la traduction*’という論文で、表現のシフトや文体のシフトを理論的に論じた。ココは起点テキストの表現上の特性や文体を維持することが、翻訳の中心的、おそらくは唯一の目標であるとし、機能性・図像性・主観性・銜い・卓立・対照といった分類に基づく文体分析を提案している。そして、表現のシフトを分析することで翻訳をシステム全体として捉え、そのうちの諸要素のうち支配的なものと従属的なものとの峻別も可能になる旨を説いている（マンデイ, 2009, p. 97)。これは、個々の翻訳シフトと翻訳全体としてのシステム、延いては翻訳規範との関係をつなぐ重要な指摘でもある。

さらに、ココと同じような視点を持つポポヴィッチは、1970年の‘*The concept “shift of expression” in translation analysis*’という論文で、翻訳シフトをいくつかのタイプに分類した（Popivič, 1970, pp. 78-87)。

- (a) 本質的シフト：2つの言語、2つの詩、2つの文体の間にある相違の結果生じる避けがたいシフト。
- (b) 包括的シフト：文学ジャンルのテキストの本質的な特徴が変容する場合。
- (c) 個別的シフト：翻訳者自身の文体や個人語によって、翻訳が全体として個人的偏向を帯びる場合。
- (d) 否定的シフト：起点テキストの言語や構造に親近性がなく情報が不正確に翻訳される場合。
- (e) 局所的シフト：起点テキストの局所的な事実が翻訳で変容する場合。

翻訳シフトに関して、ポポヴィッチはシフトが原理的になぜ起きるのかについて類型を考案したと言える。そして、原文の美的全体性の忠実な再現を試みる翻訳者の意識的努力の結果がシフトとなって現れる、と捉えた。また、ポポヴィッチは「翻訳等価」（諸説あるが、一般的に原文と翻訳の意味を「同一」ないし「類似」なものとして説明する概念。詳しくは、河原, 2014) について、翻訳等価の概念を次の4つに分類する（Popivič, 1976 in Bassnett, 2002, p. 32)。

- (1) 言語的等価：起点テキストと目標テキストの両方に言語レベルで等質性がある場合。例として、逐語訳。
- (2) 範列的等価：表現の選択軸（範列）の要素に等価性がある場合。例として、文法要素。これをポポヴィッチは語彙的等価よりも上位のカテゴリーだと捉える。
- (3) 文体的（翻訳的）等価：起点テキストと目標テキストの両方に、不変の核となる意味と言表とが同一になることを狙った要素の機能的等価がある場合。

- (4) テクスト的等価：テキストの連辞軸での構成に等価がある場合。例として，形式や形の等価。

このようにポボヴィッチは「文体的等価」と「テキスト的等価」を提唱したのであるが，これらの概念は，本質的に原文と翻訳にはズレ（シフト）が生じることが前提で，機能の点で等価を狙うとか，テキスト構成の点で等価を狙うとかいった意味での原文と翻訳の一致を唱えるものである。このことから，原文と翻訳の一致を志向する等価論と，原文と翻訳のズレを志向するシフト論は表裏一体の関係であることがわかる。

ここでチェコスロバキア学派を総括すると，この学派は詩などの韻文を念頭に置いた文体論から等価やシフトを理論づけ，そこから他のテキストタイプへと応用する発想が見られる。等価達成が時間，主体，状況，テキストタイプなどにより相対的で変化を受けるものであり，したがって本質的に原文と翻訳との齟齬＝シフトを内包しているものであることを，1960～70年代ですでに言い得ていた点は大いに評価できる。このチェコスロバキア学派の等価・シフトの議論が更なる展開を見せることなく，他の翻訳研究者へと研究が継承されなかったことが悔やまれるところである。翻訳シフト論の研究においては，個別論点の検証も必要であるが，翻訳プロセスのなかで翻訳者の認知レベルにおいて原文のどの側面が前景化し，どの側面が後景化するかによって，訳語，構文，情報の流れ，文体などが全体的に決定されるのであり，このチェコスロバキア学派が取り組んだように，「原文の美的全体性の忠実な再現を試みる翻訳者の意識的努力の結果がシフトとなって現れる」という発想から，あくまでも翻訳をシステム全体として捉えて研究することは極め

て重要であるといえる。

- (3) S. ブルム＝クルカ（1986年）

語用論学者であるブルム＝クルカは1986年の‘Shifts of cohesion and coherence in translation’という著名な論文で，「明示化仮説」を提唱した。翻訳行為には結束関係の明示化（explicitation）が必然的に伴うという仮説である。この翻訳における結束構造の変化がどのようにテキストの機能的シフトをもたらすかをいくつかの例で示した。そしてこの明示化が起こる理由は，語彙的結束構造のネットワークが言語間で異なるからである，とした。詳しくは，以下に集約される。

検証した2言語間の結束構造（cohesion）のパタンの違いから，翻訳の分析によって次のうちのいずれかが明らかになるだろう。

1. 目標テキストの結束パターンは目標言語の同じレジスターのテキストの規範に近似する傾向がある。
2. 目標テキストの結束パターンは起点言語の同じレジスターのテキストの規範を反映させる傾向がある。これはおそらく翻訳操作における転移プロセスが理由であろう。
3. 目標テキストの結束パターンは目標言語，起点言語のいずれの規範を志向したものでもない。これは独自のシステムを形成するもので，おそらく明示化プロセスを示唆するものであろう。（Blum-Kulka, 1986/ 2000, p. 313）

結束パタンの2言語間での異同により，上記の1.～3.のいずれかが成り立つと結論づけている。

また，翻訳における一貫性（coherence）のシフトについても論及している。一貫性のシ

フトについては、読者ベースのシフトとテキストベースのシフトがあり、両方ともがテキストの潜在的な意味に影響する。したがって、このテキスト効果については心理言語学的なアプローチによって実証的な研究が必要である、としている。

これはあくまでも仮説であって、明示化とは逆の暗示化の作用も同時に、かつ頻繁に観察されることからすると、明示化のみを仮説対象にしたことは、極めて跛行的な論構築であると言わざるを得ない。ただし、結束関係の明示化のみを仮説内容にしているため、仮説検証の散逸を防ぐことはできるだろう。明示化が翻訳のどの部位／位相で頻繁に発現し、どの位相では発現しない／暗示化に傾斜するかということの包括的な検証が必要となる。また、特に翻訳分野・ジャンルによるメディアの制約が大きいので（字幕、絵本などの翻訳分野）、ジャンル別の議論が必要になってくる。

(4) K. ヴァン・ルーヴァン=ズワルト (1989年, 1990年)

1984年に博士論文としてオランダ語で発表したものが、1989年と1990年にTarget誌に掲載されたのが、このK. ヴァン・ルーヴァン=ズワルトの「翻訳シフトの対照=記述モデル」である。これは小説テキストを分析対象にしたモデルで (van Leuven-Zwart, 1989, p. 154), (1) 対照モデルと (2) 記述モデルから成る。詳細は以下のとおりである。

(1) 対照モデル (van Leuven-Zwart, 1989, pp. 155-170) : 起点テキストと目標テキストを詳細に比較対照し、マイクロ構造シフト (文, 節, 句) の分類を行う。

・パッセージを “transeme” と呼ぶ「理解可能なテキスト単位」に分け、起点

テキストと目標テキストの対応関係を見る。

- ・次に、“Architranseme” と呼ぶ起点テキストの transeme の不変のコアな意味を定義する。これは「比較のための第三項」(tertium comparationis) として機能する。
- ・そして個々の transeme ごとに、2つの transeme の関係と Architranseme とを比較する。

表1：対照モデルの主な分類

シフトの分類	定義
調整 (modulation)	一方の transeme は Architranseme と符合するが、他方は意味的、文体的に異なっている場合。
修正 (modification)	両 transeme が Architranseme と何らかの形で (意味的、文体的、統語的、語用論的、あるいはこれらが複合して) 乖離している場合。
変異 (mutation)	追加、削除、または目標テキストでの根本的な意味の変化のため、Architranseme が立てられない場合。

このようにしてすべてのシフトが確認され、「マイクロ構造」レベルで分類を行ったら、各分類の生起数を合計し、記述モデルによって累積効果を計算する。

(2) 記述モデル (van Leuven-Zwart, 1989, pp.171-179) : 翻訳文学の分析を目指したこのマクロ構造モデルは、物語学 (Bal, 1980) と文体論 (Leech & Short, 1981) からの借用概念に基づいたものである<sup>註1</sup>。これは、ディスコース・レベルと物語レベルとを、3つの言語のメタ機能 (対人的・観念構成的・テキスト形成的機能) と組み合わせる試みである。ミクロ/マクロ構造シフトとディスコース/物語レベルの3つの機能とをマッチさせる複雑な図によって、これらの要素の

相互作用を析出する。

対照モデルでは、5,000語抽出したテキストにおける個々のシフトを合計し、パターンを検証する。その結果は、意味的シフトが圧倒的に多く、特定化や説明も頻度が高かった。目標テキスト志向で、目標文化での受容可能性が重視されていることが多いと結論づけた。そしてこの結果は、高位のディスコースと関連づけて、規範の特定を行う試みでもある。これは、ヴィネイとダルベルネ、そしてキャトフォードの特徴である言語分析より先に進んで、トゥーリーの規範論へと展開していくものである、という。

しかしながら、批判もある（Munday, online）。マンデイはこの対照モデルは極端に複雑であるという（Munday, 1998; Gentzler, 1993, p. 137）。8つのカテゴリーと37のサブカテゴリーを立てて、これらのすべてが明確には差別化が図られていない。また大量のテキストについてシフトをすべて分析することも困難である（コーパスを利用すればこの点はクリアされるかもしれないが）。さらには、Architranseme を等価基準として使うことは、比較のための第三項が抱える主観性の問題にぶつかる。最後に、シフトの分類と、メタ機能及び物語／ディスコースのレベルとの統計的なマッチングを行ったからといって、個々の分類の違いが相対的に重要であるようには思えないとし、複雑な計算を文体論に持ち込むことは批判に晒されてしまうことになるという。ここで展開しなければならぬのは、コミュニケーション状況や物語構造が具現化していく際にマイクロシフトの効果がどのように働いているかを分析的／批判的に検討することである、とマンデイはいう（Munday, online）。

ヴァン・ルーヴァン=ズワルトの説を等価

構築の観点（翻訳にはシフトが不可避で、等価は本質的にあるものではなく、翻訳者の主体的選択によって構築されるものであるという翻訳観）から評してみたい。まず、(1) 対照モデルの箇所から検討すると、“transeme”と呼ぶ「理解可能なテキスト単位」という概念が恣意的である。起点テキストの理解の単位（本稿では「チャンク」と呼ぶ）と目標テキストの産出の単位（本稿では「翻訳単位」と呼ぶ）の峻別なく、どちらの側からこのtransemeを立てるのが判然としない。

また、“Architranseme”なる概念の恣意性も指摘せざるを得ない。抽象的、理論的にはこの概念の定立は可能かもしれない。しかし、マンデイも批判しているように「比較のための第三項」と同じ轍を踏む結果となってしまう。やはりしっかりした理論的根拠を土台にした定立の方法を考案すべきであろう。

さらに、両 transeme と “Architranseme” の比較という方法論も説明力が希薄である。“Architranseme”は定義上、起点テキストのtransemeの不変のコアであるならば、本質的に“Architranseme”は起点言語の干渉を受けた言語的実体であるはずだ。そうであるならば、目標側のtransemeと比較対照すると必然的に何らかの乖離が生じるはずである（そもそも二言語間で構造的に乖離のない言語はあり得ない）。

次に、(2) 記述モデルの箇所を見てみると、相当語数のコーパスを分析し、パターンの生起数の累積からシフトの全体的傾向をつかみ、その結果と物語学や文体論とを関連づけながら、3つの言語のメタ機能（選択体系機能言語学における3つのメタ機能）をディスコース・レベルで論じ、マクロ構造レベルでのシフトを量的に捉えていくという手法であるが、これもマンデイが批判しているように、テキストの個別の箇所ごとに、どのようなシフト

がマイクロ及びマクロレベルで生起し、それがどのような文体を醸し出し、全体としてどのような物語のパターンを作出しているかを、量的ではなく質的に論じなければ、文体論や物語論のダイナミズム、つまり等価構築の生きた実態は見えてこない。全体としての大まかな傾向から規範を抽出するというのは、トゥーリーが陥っている誤謬ではあるが、ヴァン・ルーヴァン=ズワルト自身が言語学的分析手法とトゥーリーの規範論とを安易に架橋することを称揚している限り、トゥーリーと同じ誤謬に陥ってしまう結果となってしまった。

以上、翻訳等価の分類、翻訳シフトの分類や翻訳ストラテジーの分類などといった分類学 (taxonomy) が容易かつ盲目的に陥りがちな罫に対して自覚的になることの重要性を、少し立ち止まって考えてみた。

#### (5) S. ハルヴァーソン (2007年)

S. ハルヴァーソンによる2007年の「翻訳シフトの認知言語学的研究」は、主に Langacker (1987) を主軸とした認知言語学の観点から翻訳シフトを扱った研究で、翻訳普遍性との連関を模索するものである。

まずハルヴァーソンは既存の翻訳シフトをほぼすべて検討するなかで (Catford, 1965; Popivič, 1970; Toury, 1980, 1995; Vinay & Darbelnet, 1958/1995; Malone, 1988; van Leuven-Zwart, 1989, 1990; Klauudy, 1996), これらの諸説に欠けている点として主に3つ挙げている。(1) 起点テキストと目標テキストの形式的関係ないし意味的關係については論じているが、(認知的) 因果論的なプロセスを論じていない点、(2) 豊富なデータによる実証研究がなされていない点、(3) 翻訳シフトは義務的なものと選択的なものがあるなか、前者については翻訳普遍性との連関が論じられておらず、後者についてはコンテキストとの関係

が論じられていない点。

そこで彼女は、(1) については認知言語学的な視座から動態的な意味構築のメカニズムを Langacker (1987) に倣って「形式=意味のペア」の基本構造から概説し、かつ Croft & Cruse (2004) が「事態構成」を「我々が伝達しようとする経験のあらゆる側面の無意識的な構築」として定義し、それに立脚した「注意/際立ち、判断/比較、視点/状況依存性、構成/ゲシュタルト」といった概念を説明したことを土台に、それと既存の翻訳シフト学説の諸概念とを対照表によって示した (巻末表1)。(2) については、彼女はまだ研究途上であるとし、本論文は暫定的なデータから立論している。(3) については翻訳普遍性 (S-universal; 普遍的特性) の諸概念は巻末表1に盛り込んでいるが、コンテキスト要因については、認知的動機との連関があることは指摘するものの、同論文では十分には論じられていない。

結論として彼女は、翻訳シフトは認知的にダイナミックなプロセスであり、翻訳シフトが生起する理由を突き止めるには、①認知、②慣習、③コンテキストの3つを考慮しなければならないとする。①認知については、翻訳について一般化、標準化、平準化、単純化といった現象が起こる「重力仮説」(gravitational pull hypothesis) (Halverson, 2006) の更なる追究が必要であること、②については、翻訳シフトに義務的なものと選択的なものがあり、これらが翻訳的慣習と言語的慣習との間でどのような緊張関係があるかについて更なる検討が必要であること、③については翻訳行為モデル (Holz-Mänttari, 1984), 翻訳規範 (Toury, 1980, 1995), 機能的アプローチ (Nord, 1997; Reiß, 2000), 社会学的アプローチ (Pym et al., 2006) など広範にわたる視座が必要であることを唱えている。



これは認知言語学の視座から初めて翻訳シフトないし等価について本格的に論じた論文であると評価できる。特に一般の言語コミュニケーションにおける認知メカニズムと、翻訳に特有の諸ストラテジーを連関させながら論じている点、また、翻訳シフトを単に言語形式のみの爾後的分析や単純な意味論的比較分析に終始するのではなく、翻訳シフトをプロセスであると位置づけ、その動的プロセスの背後にどのような認知メカニズムが潜んでいるかについて正面から論じたものである点、さらには翻訳シフトと翻訳普遍性との連関を論じている点など、これまでの翻訳等価論、翻訳シフト論、翻訳ストラテジー論、翻訳普遍性などの議論よりも厚みがあると言える。

ところが、同論文はテキストとコンテキストとの連関についてその分析や理論的枠組みの提示の必要性を唱えてはいるものの十分ではなく、社会言語学的な視座を組み入れた認知言語学的視座を獲得するには至っていない点、等価ないし等価概念の本質である意味についての哲学的、記号論的な次元での深い理解が伴っていないためか、認知言語学という理論的枠組みが当然視している意味観に安易に立脚して翻訳シフトを論じており、翻訳シフトがなぜ生起するのかの原理的理由の解明が複眼的かつ深い次元で捉えきれていない点など、弱点も指摘されよう。認知言語学を自家菜籠中とする論者であればあるほど、その理論負荷性という軛から逃れられず、背負った理論の限界を露呈する結果となっていることは否めないであろう。

#### (6) コンピュータベースのシフト研究の方法

上記のように翻訳シフトに関する主な研究が登場する一方で、言語学に依拠した別の潮流も現れた。それがコンピュータを使用した

研究手法である<sup>註2</sup>。

まずその先駆格的として、Baker (1993) がコーパス言語学の翻訳研究への応用を提唱した。そして、Baker (1995) はコーパスを使った記述的研究を提案した。これは翻訳言語の普遍的特徴(明示化、簡素化、慣用化、標準化)を調査するためのものである。さらに、文学翻訳における翻訳者の文体の調査方法として、Baker (2000) は単言語コーパスに依拠した方法を提案した。しかし、これは二言語並列コーパスを用いた研究ではないため、厳密な意味でのシフト研究にはなり得ていないのが難点であるものの、これにより量的データによる新たなシフト研究の可能性が開かれた。

二言語並列コーパスを用いた翻訳シフト研究の先駆けは Munday (1998) で、これはコーパスベースで翻訳シフトを調査する方法を提示している。調査対象として、個々の語彙項目の一貫性、代名詞の結束構造、語順/分節化を選んで分析している。そしてこれらはナラティヴの変化を見るのに有効だとしている。さらに今後の研究の方向性として、文学研究においては、他動性パターン、登場人物の展開、モダリティと著者=読者関係などを調査することも有効だとしている。

以上の流れを踏まえて、Cyrus (2009) は翻訳シフトという言語学ベースの古い研究手法は、コンピュータベースの方法によって見直されるべきであることを、Munday (1998) のほか、Ahrenberg & Merkel (2000), Laviosa (2002), Olohan (2004), Cyrus (2006), Macken (2007) を引用しつつ概括的に述べている。特に、Olohan (2004) はこの研究分野の最先端の概略を記している(但し、この本の大半の研究は英語の単言語コーパスに依拠している)。また、この研究分野の立場から、翻訳学ないし翻訳研究における「言語学的再帰」を唱え

るものも登場した (Vandeweghe, Vandepitte & Van De Velde, 2007)。

日本でもこの分野の研究が少しずつ進んでいる。例えば、染谷・赤瀬川 (2011) は「大規模翻訳コーパスの構築とその研究および教育上の可能性」を示唆しているし、日本通訳翻訳学会の学会誌やウェブジャーナル『翻訳への招待』でもいくつか論稿が見られるようになった。また、台湾の Shih (2012) はコーパスベースで英語から中国語への翻訳における前置詞のシフトの研究を行っている。結論として、英中語の対照言語学的相異、テキスト機能、翻訳者の文体 (style) の違いによってシフトのあり方がダイナミックに決まる、としている。

この研究分野ないし手法の特徴は、量的研究 (語彙頻度, 語彙分布, 語彙密度, 文の長さ, キーワードの統計的比較) と質的研究 (個別事例のコンコーダンス・ラインの詳細分析) の両方からアプローチし、特にコロケーションと語彙項目の典型的な使用法の調査において分析者の直観をはるかに凌ぐ翻訳シフト分析が可能になることである (マンデイ, 2009, pp. 295, 298)。しかし、同時にこれは、テキスト全体の傾向性であるとか個別事例の共起語彙などの傾向性を知る、あくまでも言語ベースの研究手法であり、なぜ翻訳シフトが生起するのかといった、翻訳の産出と伝達の社会文化史的コンテキストとの関係づけが等閑視され、その点が常に問題となる。

#### (7) その他の翻訳シフト研究

以上が翻訳シフト研究の主な潮流であるが、2000年以降のその他の研究も若干記しておきたい。

Osimo (2008) は意味ベースの翻訳シフトのモデルを提案している。これは、翻訳等価や翻訳シフトの分析 (7つのシフト範疇) を土

台に、翻訳における意味を探究するモデルである。これは翻訳研究から言語学へインパクトを与えようとする目論見もあるようだ。

他方、翻訳研究の範疇のものだと、例えばイランの Akbari (2012) は、児童文学における構造上の翻訳シフトについて論じている。具体的には、情報の再配列、追加、削除、文の時制の変化といった構造上のシフトについて分析、英語からペルシャ語へ翻訳する文学翻訳者は意識的な問題解決方略 (明示化、補償) を使って、不可避的な意味の喪失を最小限にする、としている。

また同じくイランの Hosseini-Maasoum (2013) は前述の Catford (1965) のカテゴリーシフト (構造的シフト, クラスのシフト, ユニットのシフト, 体系内シフト) に関して英語からペルシャ語への翻訳を対象に分析を行っている。

この2つのイランの研究は、言語分析ベースのキャトフォード時代への逆戻りのような研究である。しかしながら、多言語間での翻訳シフトの地道な研究は必要であり、決して無駄になるものではないだろう。

同様に言語分析ベースの研究として、英語 = インドネシア語の発話行為動詞の意味的シフトを扱った Sukra (2008) がある。結論としてシフトの原因を、二言語の特徴や体系の違い、言語外要因として選択的・義務的決定を行う翻訳者の能力、翻訳の目的、目標言語の読者、テキストや文体の特徴、を挙げている。

その他、別の学際性のある研究でインパクトがあるものとして、タイの Chueasuai (2013) がアメリカの女性雑誌のタイ語版の翻訳を対象に選択体系機能言語学に依拠して、言語テキストの言語的意味とヴィジュアル上の記号的意味のシフトを調査しているものがある。これは記号としての言語のヴィジュアル的なシフトを扱った、翻訳研究としては珍しいも

のであると言える。しかしながら、この視点は記号論の点からも、重要であると言える。

(8) これまでの翻訳シフト論の総括

これまでの翻訳シフト論の潮流をまとめると次のようになる。

表2：翻訳シフト論の総括

研究者名	シフト項目	内容
レヴィー (1963年)	シフトのテキスト的側面 (文芸翻訳の美的効果)	テキストの特徴 (指示的意味, 暗示の意味, 文体的布置, シンタクス, 音の繰り返し, 母音の長さ, 音の明瞭度), ゲーム理論
キャトフォード (1965年)	シフトの部位・位相	ランク (文, 節, 句, 語群, 単語, 形態素)
ミコ (1970年)	表現/文体のシフトのテキスト的側面	文体的特徴 (機能性, 図像性, 主観性, 銜い, 卓立, 対照)
ポポヴィッチ (1976年)	表現のシフトの原理的分類	本質的シフト, 包括的シフト, 個別的シフト, 否定的シフト, 局所的シフト
ブルム=クルカ (1986年)	テキスト構成の一局面でのシフト	結束構造における明示化仮説
ルーヴァン=ズワルト (1989, 1990年)	マイクロ構造シフト, マクロ構造シフト	対照モデル (調整・修正・変異), 記述モデル (物語学・文体論)
ハルヴァーソン (2007年)	シフト生起の理由の分類	①認知 (重力仮説, 翻訳普遍性), ②慣習 (義務的シフト・選択的シフト, 翻訳的慣習・言語的慣習), ③コンテキスト (翻訳学の諸概念)

以上からすると、旧套の翻訳シフト論の研究は、まだその全体像が十全に描けていない段階であると言える。上述のように翻訳シフトの定義が「起点テキストを目標テキストに翻訳するとき起きる小さな言語的变化」である以上、翻訳の「言語的側面」に焦点を当てた議論に終始してしまうのは必至である (今後、この定義も社会文化的側面、イデオロギー的側面を考慮して見直しが必要である

ことは後述する)。しかし、ハルヴァーソン以外、社会文化史的コンテキストを度外視した議論を展開したことが原因となって、翻訳シフトという翻訳研究にとって極めて重要な鍵概念が、他の重要概念 (例えば、等価・ストラテジー・規範・スコポス・イデオロギーなど) との連関において議論が重ねられ、中身が深められることがないままになってしまったと思われる。

尤も、ルーヴァン=ズワルトは (社会記号論の一つである) 選択体系機能言語学を取り入れたり、後述する (目標言語社会を照射した) G. トゥーリーの翻訳規範論と言語学的分析手法を結び付けようとしたりしたが、翻訳シフト分析の手法自体が複雑になりすぎたため、却って社会的要因との架橋がうまくいかなかったものと思われる。

そこで、以上のことを踏まえて、翻訳の「シフト」概念について、本質論に切り込んで検討する。

### 3. 翻訳シフトの本質

翻訳シフトにおける根源的な問いは次の2つである。「シフトはどのように記述できるか」と、「シフトはなぜ起こるか」である (Palumbo, 2009, pp. 104-106)。前者の問いについては、シフトが言表において発露することに鑑み、翻訳行為の言語面に着目してきた旧套の翻訳シフト論がかなり記述を試みてきたと言える。しかも、この翻訳シフトという概念は、これに隣接すると考えられる「翻訳等価」「翻訳ストラテジー」などの概念を論じるなかで併せて議論されているため、言語分析を主眼にした翻訳研究では広く翻訳シフトが扱われてきたと言えよう (翻訳等価論に関しては、河原, 2014参照)。

他方、後者の問いは、突き詰めると「なぜ、翻訳は原文とズレるのか。なぜ忠実な翻訳は

不可能なのか」といった翻訳不可能性や翻訳不確定性の問題と表裏一体である。

これには静的な言語構造面（ラングレレベルでの二言語間の構造的差異）と動的な翻訳行為面（より一般的には動的な言語コミュニケーション行為出来事、ないし、パロールレベルでの主体の行為の不確定性）におけるズレないしシフトが大いに関係している。前述のように旧套の翻訳シフト論が記述を試みてきたのは、静的な言語構造面、ラングレレベルでの二言語間の構造的差異が、具体的な原文テキストと翻訳テキストとの間でどのように発現しているかの分析であると言える。そしてシフトが生起する根源的な理由を、あくまでも二言語間の言語構造の差異に帰着させようとしてきたのである。したがって、本来的に翻訳研究はパロールの研究であるところ（Koller, 1979）、現実的にはラングの研究を行ってきたのである。

では、以下でこの2つの根源的な問いについてもう少し掘り下げて検討する。

### 3.1 翻訳シフトの記述の視角と方法

まず、シフトを論じるには、その前提となる「不変」なるもの（翻訳の過程で変化しないまま残る要素）を措定しなければならない（Bakker & Naaijken, 1991）。これは、「翻訳等

価」という概念が論じられる際に併せて論じられてきたものであり、比較のための第三項（*tertium comparationis*）もその一つである。翻訳シフトとの関係で言うならば、この不変なるものは、①翻訳前の模範的・規定的な必須条件となるか、②翻訳後の記述的・発見的な概念となるかに講学上は分かれる。

①の場合で、(a)シフトは好ましくないものとされれば「シフトするな」という当為命題が含意され、シフトは起点テキストの価値や特性を変容させる（つまり不変なるもの、等価から逸脱する）間違いや誤訳とされることになる。他方、(b)シフトは好ましいものとされれば「シフトせよ」という当為命題が含意され、シフトは言語体系の差異を克服するうえで必要または望ましいものと捉えられることになる。この延長線の議論が Nida (1964) の動的等価 (*dynamic equivalence*) や Vinay & Darbelnet (1958) の翻訳の手順 (*translation procedure*) であり (Vinay & Darbelnet はシフトという用語は使っていないが、議論している内実は同じである)、これをさらに敷衍して統語論・意味論・語用論の各レベルで詳述したのが Chesterman (1997) である (Bakker, Koster & Leuven-Zwart, 2009)。

したがって、このように①のなかのシフト肯定論の範疇で議論が展開されているのが、一連の「翻訳手続」(*procedure*) 及び「翻訳方略」(*strategy*) という位置づけになる。これは翻訳前ないし翻訳中にどのようなシフト操作（転換操作；*conversion*）を行うかという展望的な (*prospective*) 議論である。以上のように、不変なるものを翻訳前の模範的・規定的な必須条件として捉える考え方とそれに依拠した諸概念、諸理論装置は当為命題を含意した模範的・規定的な翻訳のあり方を論じる「べき論」である。

②の場合は、翻訳行為後に爾後的に回顧し

表3：翻訳シフト論の記述法

不変なるもの	シフトの志向性	理論, 概念
①翻訳前の模範的・規定的な必須条件	(a) 消極志向：「シフトするな」	等価からの逸脱, 間違い, 誤訳
	(b) 積極思考：「シフトせよ」	動的等価論, 翻訳手順論
②翻訳後の記述的・発見的な概念	(c) プロセス志向	義務的シフト, 選択的シフト
	(d) 結果物志向	言語学ベースの研究, 文体論ベースの研究, 記述的翻訳研究 (規範研究)

て (retrospective) 静的にシフトのあり方を分析し記述するもので、記述的 (descriptive)・発見的 (heuristic) な構築物 (construct) として描かれる。これには、(c) プロセス志向 (product-oriented) のものと、(d) 結果物志向 (product-oriented) のものがある (但し、両者の境界は曖昧である)。

(c) プロセス志向の研究については、本質的に翻訳の認知プロセスがブラックボックスで解明するのが困難なため、翻訳の最中にどのようなシフト操作ないし転換操作 (conversion) を起こしているかの記述・説明は難しい。しかしながら、上述の義務的シフトと選択的シフトがあることは指摘できるだろう (Kade, 1968 in Bakker, Koster & Leuven-Zwart, 2009)。

(d) 結果物志向の研究については、Catford (1965) が先駆け的に行った前述の研究が言語学ベースのもの、Popivič (1970)、Miko (1970) が文体論ベースのものとして挙げられる。Popivič (1970) が提示した前述の5つのシフトのうち、本質的シフトと個別的シフトは義務的シフトと選択的シフトに大いに関連するものである。文体的シフトを考慮すると、本質的シフトは二言語間の言語構造の相違だけでなく、原文と翻訳の詩学や文体の不可避な相違も含むものであり、個別的シフトは翻訳者独自の文体的性向や個人語レベルでの主観性も含むものであると言える。

また同じく結果物志向の研究に関し、翻訳の社会的機能面に着目し記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies) を行う G. トゥーリーは、目標言語内で機制する翻訳規範は、適切性 (adequacy) と受容可能性 (acceptability) の間で翻訳等価の位置を決定し、翻訳シフトは適切性からの逸脱であると定位した (Toury, 1995/2012)。そして、翻訳行為を「規範が機制する行為」(norm-governed

activity) であると定義する彼は、規範分析の手続的概念として「等価」を前提的に認めたとうえで、個々のシフトを確定することによって当該テキストの翻訳規範を確定することになるとしている (ここで、義務的シフトは「不変なるもの」として考えられ、規範ではなく規則が機制するシフトだとして規範の分析からは手続的に排除されている)。またコーパスを用いればシフトに一定のパターンや規則性を見いだせる (翻訳普遍性) とした。

そしてさらに前述の言語学的分析と文体論的分析を総合しようとした van Leuven-Zwart (1989, 1990) や認知プロセス論と言語学および社会的諸要因との連関を示そうとした Halverson (2007) も結果物志向の研究であると言える。

ここで注意しておきたいのは、Popivič (1970) が指摘するシフト解釈の多義性・相対性である。「原文から見て新しいものとして出現したもの、あるいは (目標言語社会の側から) 期待されていたのに出現していないものはすべてシフトだと解釈される」というシフトの概念定義 (Popivič, 1970, p. 79。なお括弧内は筆者が補足) には、3つの要素が認められる。原文と翻訳の関係、目標社会における翻訳の期待・受容、シフトの解釈可能性の幅、の3つである (Bakker, Koster & Leuven-Zwart, 2009)。まず、原文にない要素が翻訳に見られる場合は、シフトがあると認定される。また、原文から見てシフトがない (ゼロシフト) と思われる場合であっても、目標言語社会での期待を裏切ると、これもシフトを構成することになる。つまり、シフトの有無・性質・程度はシフトの解釈の視点 (起点から見るか、目標から見るか) や解釈者の主観に左右されるのである。これはポポヴィッチがいう二重の性格 (dual character; Popivič, 1970, p. 82)、あるいはレヴィーがいう翻訳の二重の

地位 (double status; Levý, 1969, p. 72), つまり原文の規範と翻訳の目標言語側の理想の両方に従うべき性質, あるいは原文を別の言語で再構成されたテキストである面と目標文化で翻訳がそれ自体として機能するテキストである面を併せ持つ性質があるため, シフトの解釈に多義性・多様性が生まれ相対的になってしまうのである。そこでシフトはあくまでも分類上の性質 (categorical quality) を帯びたものであると言われることもある。

### 3.2 翻訳シフトが生起する複合的理由

次に、「シフトはどのように記述できるか」という前項の問題意識を承けて、「シフトはなぜ起こるか」へと問題設定を移行させてみたい。

シフト概念に解釈の多様性・相対性があるとするならば, 分析の仕方によってもシフトの認定は多様になりうる。それは, 一般に現象に概念を当てはめるといふ記述・発見的作業ないし記号操作は構築行為であるからである。前項で検討したシフトの記述法は主としてテキストベースの言語分析寄りのものであり, これらの記述法の背後には, 言葉の意味は明確で固定したもので, (Architranseme など称される) 安定した共通核・不変なるものがあって, それ以外はすべてシフトであるという考えが背後にある。つまり, 単純な等価概念を据えた言語／翻訳イデオロギーを有した理論群であると言える。

この点, ピムはシフト分析の方法を大きくボトムアップ型とトップダウン型に分けている (ピム, 2010, pp. 112-118)。ボトムアップ型は前述のルーヴァン＝ズワルトの学説が典型であるが, 言語の小さい単位 (語, 句, 文) から分析を始め, 大きな単位 (テキスト, コンテキスト, ジャンル, 文化) へと射程を広げていく分析方法である。ピムによると, こ

の方法論は出発点である言語分析の段階でシフト解釈の不透明性が払拭されず, 結局は簡約化理論 (reductive theories) による方向づけが必要となるため, 多くの分類法・学説が出現するとしている (ピム, 2010, pp. 114-115)。前述の翻訳シフト論が多種多様に出現するのも, また関連概念である翻訳等価論, 翻訳ストラテジー論なども多彩な論が展開されるのも, ここに根本的な理由の一つがあると言えるだろう。

では, もう一つピムが分類したトップダウン型 (ピム, 2010, pp. 115-118) について検討する。前述のスロバキア系の研究者が提唱していた「表現のシフト (shifts of expression)」の分析は, 例えば前述のように原文の規範と翻訳の規範という2つの文体規範があることを主張するなど (Popivič, 1970), 単純な等価の維持・再現のモデルではない。これは著者の声と翻訳者の声の多声性を認める文学の文体論や, シフトは歴史的諸要因によって左右されるとする翻訳研究の文化的転回や, あるいは翻訳の普遍的特性を探究する方向性などへと展開する総合的な研究枠組みを示唆するものとしてピムは高く評価している (ピム, 2010, pp. 115-116) (但し, 前述のように本稿筆者は, 文体論にフォーカスを当てたスロバキア系の諸学説は, 基本的には社会文化史的な複雑なコンテキスト諸要因を理論に編入しているとは言い難く, 言語テキストベースの研究を超えるものではないと考える)。またこれに関連し, Holmes (1970) の韻文の翻訳に関するシフト分析も, 翻訳者の意思決定は常に文化的制約を受けることを示唆するものとしてピムは紹介している<sup>註3</sup>。そして翻訳シフトを左右する莫大な数の状況変数の記述的方法のトップダウン型のモデルとして, 「システム」「規範」「目標側志向」の3つをピムは取り上げている (pp. 118-132)。

その一つとしてトゥーリーの記述的翻訳研究を取り上げる。彼は翻訳を規範に機制される活動であるという概念定義をしており、そこには不変なるもの以外、つまり翻訳シフトはすべて規範によって説明可能であるという前提があるようである。これは翻訳という多義的・多面的・多層的な現象ないし事象を説明するために簡約化された一つの仮説である。しかし、規範以外にも社会的・認知的・言語的機制要因は様々あるはずであり、多くの批判を集めている。

例えば、イーヴン＝ゾウハーのシステム理論の流れを汲む Hermans (1999) は、トゥーリーの用語（起点言語規範適合性を表す「適切さ」／目標言語規範適合性を表す「受容可能性」）は評価的な含みがあり客観性に欠けること、目標「言語」重視の姿勢であること、翻訳に関わるすべての変数を知り、その法則性を導くことの不可能性、などの疑問を提出した。また、多元システム理論を批判する Gentzler (1993/2001) は、僅少の事例から一般化を行うことは過剰汎化につながり、それは単なる信念の焼き直しにすぎないこと、記述された規範はあまりに抽象的なものであること、などとシステム理論と共通した批判を行った。さらに、Munday (2012) も、シフトを同定する際に行う目標テキストの起点テキストへのマッピングがその場限りのものであり、このモデルは客観性に欠け、再現可能なものではないこと、再現可能性を重んじる準科学的な規範／法則というアプローチがどの程度、状況変数が多岐にわたって複雑な翻訳現象に適用可能か疑問であること、トゥーリーの2つの法則自体、相互矛盾を孕んでおり、規範や法則よりももう少し複雑な要因を組み合わせたモデルの提示が必要であること（起点テキストパターンの効果、目標テキストにおける明快さの選好と曖昧性の回避、思考プロセスの

効率を最大化する必要性のような翻訳者の現実的な考慮、時間の制約の下での意思決定の重要性など）を説いている（マンデイ, 2009, pp. 179-181）。

したがって、言語テキスト分析をベースにしつつDTSを自身の理論の射程内に（無批判のまま、ある種都合よく）編入しようとしている前述のルーヴァン＝ズワルト、ハルヴァーソン批判も、もう少し視野の広い観点から見直しが必要になってくると思われる。

以上の諸学説を検討すると、科学的研究への志向性が簡約化理論への誘因的契機となり、複雑な諸要因からモデル化・理論化可能なものを抽出し、そこからある種のトップダウン型で演繹的に説明・体系化しようとする傾向が看取される。しかしながら、各理論が背後に負っている理論負荷性について再帰的な考察がないまま議論を展開していることが、翻訳研究ないし翻訳学の持つ現在の最大の死角であり課題であると言える。

そこで必要になってくるのが、翻訳自体を対象にした研究の理論的枠組みのみならず、翻訳諸理論を研究の対象にした「メタ理論」である。この両方を満たすものとして、C. S. パースの記号論に依拠した社会記号論を検討し、その翻訳分析への適用可能性と、翻訳理論のメタ理論分析への適用可能性を見たうえで、翻訳シフトの全体像の見通しを立ててゆく。

## 4. 社会記号論の適用可能性

### 4.1 社会記号論から見た言語コミュニケーション行為

まずは翻訳行為や理論構築行為の本質を見極めるために、翻訳や理論構築が言語操作・記号操作の一種であることを前提に、米国・プラグマティシズムの科学哲学者・パース（Charles Sanders Peirce: 1839-1914）が提唱し

た記号論 (semiotics) について見てゆく。

パースは記号一般について、対象 (object) と記号 (sign) との間に大きく、類像性 (iconicity), 指標性 (indexicality), 象徴性 (symbolicity) という記号作用を見出した。まず、①この類像性は、対象 (Object; O) と記号 (Sign; S) とが同一/同等/類似/相似的であることを示す記号作用であり (指標性はSがOの存在を示す作用, 象徴性はSとOは恣意的な関係であることを示す作用), この記号作用は解釈項 (interpretant; 解釈者による解釈) を通して「対象≒記号」であると解釈者が見なす, つまり両者の間に等価性を見出すという記号に対する人の認知作用であると位置づけられる。

しかしながら、②この認知作用は同時に、その認知行為の一回的、偶発的で固有な意味作用でもあり、これは当該コンテキスト特有の意味を帯びる語用論的な解釈であって<sup>註4</sup>、当該等価構築行為の一次的/二次的社会指標性をも有する (小山, 2008, 2009, 2011)。一次的社会指標性とは、話し手・聞き手などのコミュニケーション出来事参加者たち、言及指示対象、これらの間の社会的距離 (親疎), 力関係 (上下関係), 場 (コンテキスト) のフォーマリティーなどを示す概念である。また二次的社会指標性とは、これらのレジスターの使用人たち (話者たち) のアイデンティティや力関係上の位置を強く示す (指標する) という特徴を有する (小山, 2011, p. 184)。

さらに、③これらの類像作用、(一次的/二次的社会) 指標作用の背後には、行為者のもつ信念体系や価値観といった象徴的な世界観が言語実践行為に意識的ないし無意識的に反映されている (象徴作用の反映)。

このように①類像作用、②指標作用、③象徴作用という3つの作用が三位一体となって複合的に等価構築、意味構築を行いつつ、絶

えず意味改変をしているのが、理論構築を含めた人の言語実践行為の意味および意味づけのあり方であるといえる。

## 4.2 社会記号論から見た翻訳行為

これを翻訳行為一般に適用するならば、対象Oに対してSという記号を当てる行為はまさしく記号間翻訳であり、その一形態としてOが起点言語テキスト、Sが目標言語テキストである場合が狭義の翻訳、すなわち言語間翻訳であると言える (cf. Jakobson, 1959/2004; 真島, 2005)。そして両者に通底するのは、①「O≒S」(対象と記号が等価な関係) であると見做す行為、すなわち等価構築行為という性質である (河原, 2011)。しかしながら同時に、②この「O≒S」は特定のコンテキストで生起する翻訳行為であり、一回性・偶発性・固有性を有するもので、このようなO≒S等価構築行為自体のコンテキストを指標する記号作用をも同時に有する。さらに、③翻訳者の有する価値観・信念体系といった象徴的世界観が翻訳意識となって作用する側面もあり、これらの複合的な意味構築行為が翻訳行為であると言える。

## 4.3 社会記号論から見た理論構築行為

今度はこれを理論言説に適用するならば、翻訳をどのようなものに見立てて理論化するか、つまりどのようなメタファーが関与しているかが、理論構築の根底にあると言ってよい。そこで、メタファーによる機能抽出の方法を略説すると以下ようになる。

「AがXとして (“as”) 見立てられる」という言語形式を一般論として敷衍すると、「A as X / XとしてのA」(直喩; シミリー), 「A be X / XであるA」(隠喩; メタファー) となる。厳密に言えば、“as” は中核の意味として「等価」(equivalence; equal value)を表しており (河



原, 2008), 本来, 被説明項Aとは異なる説明項Xを, Aと等しい (equal) 価値を有するもの (value) と看做すことによって, その本質的一面を詳らかにするレトリックである。そして, 隠喩形式の場合は, 言語表現上比喩であることが隠れているが, 「A be X / AはXである」という言語形式には記述文, 定義文, 隠喩文の3つの機能があり (田中, 2002), 隠喩文として直喩文と同様の機能を有する。

このことを踏まえて, 学問の方法論としてのメタファーについて考えてみると, 哲学者マックス・ブラックが, 「おそらくすべての科学はメタファーから出発し, 代数に終わる。そして, おそらくそのメタファーがなかったら, 代数はついに存在するには至らなかったであろう」 (Black, 1962) と言ったように, あらゆる学問はメタファーによって支えられて展開していると言える。翻訳学もその例外ではない。理論 (θεωρία; theoria) とは研究対象をどのように見るか, という見立ての問題であり (Chesterman, 1997, pp. 1-2), 認知意味論の出発点としてメタファー論の転回を担った Lakoff & Johnson (1980) のメタファーの本質論は次の点に集約できる (谷口, 2003, pp. 9-44)。

- (1) メタファーの本質は, ある事柄を他の事柄を通して理解し, 経験することである (経験基盤主義)。
- (2) 人間の思考過程の大部分がメタファーによって成り立っている (主観的意味論)。
- (3) 人間の概念体系がメタファーによって構造を与えられ, 規定されている (カテゴリー論)。

通常, メタファーは, それによって比較的抽象的な, あるいは本来充分な構造を持たない事柄を, より具体的で構造化された事柄に

よって理解することができるという性質 (上記(1)(3)) があるとされている (Lakoff, 1993)。“A as X” の形式で言うならば, Aという抽象概念をXという具体的で構造化された事柄によって理解する, というものである。ところが, 学問におけるメタファーとしての“as”の語用のあり方を考察すると, メタファーの一般的な特徴を表した用例もあるが, むしろ, AよりもXのほうが抽象概念であることも多々ある。いわば, 抽象概念を抽象概念によって操作定義, 特徴記述などを行うという特徴が概ね観察できる。

このことを, 学問の場における語用論 (「学問語用論」と名づける; 河原, 2008) として捉え直しをするならば, 次のようになる。まず, 学問的言説の生成者たる研究者は, A-as/be-X という言語形式で, A (学問的考察の対象たる抽象概念) をXによって定義づけ, 特徴づけ, 説明し, 概念の考察を深化させることで学問的真理を探究する。この時, Xとしては, 個別化可能なもの (具体名詞) から言及指示可能なもの (抽象名詞) までを使用する。

そのうち, (1) 具体名詞の抽象度が低いものであれば, 直接的に写像を動機づける共起性によって具体的なイメージを伴った意味づけが行われるであろう。

(2) 具体名詞の抽象度が高いものであれば, 類似性に基づいてA, X両者に何らかの共通点を見出しながら (田中の言葉を借りると, 連鎖を介して記憶を呼び込み取捨選択し, 加工, 変形して纏め上げる作業, つまり「記憶連鎖の引き込み合い」; 田中・深谷, 1998), より創造的な意味づけが行われているであろう。

また, (3) (抽象度の極めて高い) 抽象名詞であれば, 経験的基盤を欠く解釈共同体の集合表象を表す象徴記号であり, 特定の集合的解釈体系 (ここではアカデミア) のトークン

であるので、特定の学問分野の専門用語としての概念定義を背後に持ちつつ、その分野特有の解釈体系による意味づけを行いながら言葉を使用するであろう。

ここで研究者は、かようなトークンとしての学術用語を使用し、各々の専門ごとの言説の「型」に填まった言説を展開することによって、その学問的言説の生成者たる研究者の帰属する学問共同体を当該学術用語の使用によって指標する、というマクロなコンテキストを指標する関係にあるといえる。そして、その読者である他の研究者は、その言説の「型」を繰り返し「なぞる」ことによって当該学問コミュニティへと参画し、やがてはそこへ自らのアイデンティティを見出す、というプロセスを経ることになる（小山, 2005参照）。

また、一回一回の言説は語用実践行為として常に状況づけられており（メイ, 2005, p. 329）、「状況の参加者達は、自分たち自身の発語を、そして他の参加者達の発語を、受け入れること自体により、そこで発語が発せられ、そこで彼らが発語者となるような社会状況を確認し再生する」のである（メイ, 2005, p. 330）。かようにして、言表の連鎖的伝播の営みが学問的相互行為によって行われ、その際に学問的言説空間の中でメタファーによる機制が極めて大切な役割を演じていると言える。

このように、メタファーの機制に支えられて抽象的・概念的な理論構築は展開されると言える。そして、「翻訳をXとして見なす」というメタファー使用は、社会記号論的には、「翻訳≡X」という類像的な記号作用を持ちつつ、そのような見立てを行う行為者／理論家の社会的属性を示しつつそれを強化するという社会指標作用を有していることになる。さらには、理論家の有する価値観・信念体系といった象徴的世界観が言語／翻訳イデオロ

ギーとなって理論構築に作用する側面もある。

以上をまとめると、①「翻訳≡X」であること見做す行為が理論構築の土台にあり（理論の類像性）、これと同時に、②この「翻訳≡X」は特定の学術コンテキストで生起する理論構築行為であり、社会文化史的コンテキストの負荷性を有するもので、このような理論構築行為自体のコンテキストを指標する記号作用をも有する（理論の社会指標性）。さらに、③理論家が信奉している非経験的な共同幻想（イデオロギー）や価値信念体系といった象徴的世界観が理論に対する意識となって作用する側面もあり（理論の象徴性）、これらの複合的な意味構築行為が理論構築行為であると言える（註4も参照）。

#### 4.4 社会記号論から見た翻訳シフトと翻訳シフト理論

##### (1) 社会記号論から見た翻訳シフト

まず翻訳シフトという現象を社会記号論から説明すると次のようになる。パース記号論における、①類像性、②指標性、③象徴性は、翻訳行為における①言語的側面、②社会文化史的側面、③イデオロギー的側面、というふうに大きく峻別し対応させることができる。

①類像性は、起点言語＝目標言語間の言語の意味と形式の両面における同一／同等／類似／相似性が、形態素・語・句・節・センテンス・テキスト構成の各ユニットにおいて実現されるという、言語テキストにおいて発露されるものである。厳密に言うと、二言語間では言語構造そのものが異なり、それに応じて意味と形式も異なる。したがって純粋な完全等価はあり得ない。しかし、このような翻訳不可能性が本質的に存在しつつも、それを超越して翻訳が可能となるのは、ST（起点テキスト）≡TT（目標テキスト）であるとの見立

て行為を行う，つまり二言語間で等価構築行為を行うからこそである。

しかしながらその等価構築は言葉の意味解釈の不確定性により揺らぎがあり相対的なものである。その不確定性には，②ST≡TTであるとの見立てを行う翻訳者の社会文化史的なコンテキストの反映（社会指標性）や，③その翻訳者の持つ価値観や信念体系，言語や翻訳に関するイデオロギーの介入（象徴性）を必然的に伴う。

以上から，①言語的側面，②社会文化史的側面，③イデオロギー的側面の諸側面において翻訳シフトは必然的に生起する。となると，②社会文化史的側面がどのように①言語的側面に反映するのかについての指標的類像作用（indexical icon）と，③イデオロギー的側面がどのように①言語的側面に反映するのかについての象徴的類像作用（symbolic icon）の両面において，翻訳シフトを分析する必要がある。これには，翻訳シフトに特化した，本稿で検討した諸学説だけでは極めて不十分であり，翻訳学全体の諸学説を俯瞰的に検討し，①②③の諸側面の全体的布置を整備していく必要がある。

以上を踏まえて翻訳シフトを再定義すると，「起点テキストを目標テキストに翻訳するときに不可避免的に起きる言語的，社会指標的，イデオロギー的变化」ということになる。そしてこの変化が言語操作・記号操作上不可避であることを見据えたのが等価構築論であり（河原，2014），このような翻訳等価構築論，翻訳シフト論を踏まえたうえで翻訳学ないし翻訳研究のこれまでの諸概念装置や諸学説を検討していくことが必要となる。

## (2) 社会記号論から見た翻訳シフトに関する諸学説

以上を承けて，次に翻訳シフトに関する諸

学説を社会記号論から説明すると次のようになる。各学説が翻訳行為のうち，上記①②③のどの側面を前景化させて分析しているかをメタ分析すること，そしてなぜそのような分析をしているかについて，①類像性の観点からはその背後にある言語／翻訳メタファーを探ること，②社会指標性の観点からはその学説が提唱された社会文化史的コンテキストを探ること，③象徴性の観点からはその学説の提唱者が属する学術コミュニティのイデオロギー（集団表象としての意識）やその提唱者個人のアクシオロギー（価値観）を探ることが必要となる。

このように考えてくると，これまでの翻訳シフトに関する諸学説は，単純な等価性を前提に単純な言語転移モデルに留まるもの，目標テキストのテキスト性や文体を意識した翻訳の再構成性に着目しつつも言語ベースの分析に留まるもの，認知言語学を借用して翻訳の認知プロセス分析を編入しつつも言語ベースの分析に留まるもの，という位置づけとなることがわかった。また，トゥーリーのように翻訳規範といった社会文化史的コンテキストを加味した理論展開も見られるが，翻訳行為の多義性・多面性・多層性を包括的に扱うのに十分耐えられるモデル化はまだ見られないこともわかった。

今後の展開としては，前項の翻訳シフトの定義，そして翻訳等価構築論の議論を承けて，社会記号論から見た翻訳学／翻訳研究の全体の布置を記したうえで，これまでの翻訳研究の諸学説の各諸相，つまり①類像性，言語／翻訳メタファー，②社会指標性，社会文化史的コンテキスト，③象徴性，イデオロギー・アクシオロギーを探りつつ，各々の学説が主張する論の翻訳シフト性の部分を抽出していく作業が必要になるだろう。具体的には，河原（2014）で示した等価構築論の観点から以

下の分類に従って、各学説に組み込まれている翻訳シフトを丁寧に検討することとなる。

1. 近代以前の二項対立図式とその展開（直訳vs. 意識／忠実さなどを鍵概念として論じていた時代）…翻訳研究史
2. 言語学的分析の諸学説（言語等価論）…翻訳シフト論, 翻訳ストラテジー論, 翻訳の認知プロセス論など
3. 社会コミュニケーション行為性を加味した言語分析の諸学説（社会等価論）…テキストタイプ論, スコパス理論, レジスター分析論, 多元システム理論, 翻訳規範論など
4. 社会文化的コンテキスト中心の翻訳分析の諸学説（等価誤謬論）…書き換え理論, ジェンダー翻訳理論, ポストコロニアル翻訳理論, 翻訳の倫理・役割論など
5. 翻訳哲学・翻訳思想（等価超越論）…他者性, 翻訳者の使命, 純粹言語論など
6. 学際的・複眼的な翻訳分析の諸学説（等価多様性論）…翻訳分野・ジャンルの多様性, 研究手法の多様性など

## 5. まとめ

翻訳シフトを分析することと、翻訳シフトに関する諸学説をメタ分析すること。この両者において社会記号論の知見が適用可能であることを見てきたが、これにはある程度の実証主義的な裏付けが必要となる（そうでないとメタ理論が空洞化してしまう）。それは別稿で行うこととするが、本稿はやや混迷している翻訳学の諸学説に、全体の学を志向しつつ諸理論を包括する視座の作成を目論み、これまでの翻訳シフト論の潮流を総括した。

今後の展開の可能性として一つ付言すると

するならば、言語テキストの言語的意味とヴィジュアル上の記号的意味のシフトを調査したタイの Chueasuai (2013) は重要である。今後ますますマルチモーダルな翻訳が進むなか、単なる言語間の翻訳シフトだけでなく、記号間翻訳におけるシフトの分析も進めていく必要がある。これは単に斜め翻訳といわれている視聴覚言語転移を伴う映像翻訳をはじめとしたマルチモードの翻訳のみならず、翻訳全般における文字のメディア性に着目した言語景観論の観点も重要になってくる。その意味で、ヤコブソンの言う記号間翻訳 (Jakobson, 1959/2004) の議論を踏まえた言語間翻訳の記号論的シフトの議論も重要になってくる。

## 註

1. 驚くことに、このマクロ構造モデルは、物語学 (Bal, 1980) と文体論 (Leech & Short, 1981) からの借用概念に基づいたものであるとしているにもかかわらず、ヴァン・ルーヴァン=ズワルトは物語論や文体論に関する他の重要な文献を参照していない。
2. これは、コーパスベースの機械翻訳の研究とは異なるので注意が必要である。
3. Holmes (1970) は韻文の翻訳文体に関し、韻文を常に散文に翻訳するというシフトに加え、①起点テキストに似た形式を翻訳で使う模倣形式、②起点テキストに似た機能を果たす形式を選択する類似的形式、③テキストの内容に基づいて新しい形式をつくる有機的形式、④個々の翻訳者が各自解決法を見つける外的形式の4つの選択肢を打ち立てた (ピム, 2010, p. 116-117)。
3. カテゴリー化／等価行為は、コンテキスト負荷性 (社会指標性) のみならず、そのコンテキストが帯有する恣意性・文化相対性・利害関心負荷性 (象徴性) も有している。

参考文献

- Ahrenberg, L. & Merkel, M. (2000). Correspondence measures for MT evaluation. In *Proceedings of the second international conference on linguistic resources and evaluation (LREC-2000)*. Athens, Greece. pp. 1255-1261.
- Akbari, M. (2012). Structural shifts in translation of children's literature. *International journal of linguistics*, 4 (2), pp. 576-594.
- Baker, M. (1993). Corpus linguistics and translation studies: Implications and applications. In M. Baker, G. Francis & E. Tognini-Bonelli (Eds.). *Text and technology: In honour of John Sinclair*. (pp. 233-250). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Baker, M. (1995). Corpora in translation studies: An overview and some suggestions for future research. *Target*, 7 (2), pp. 223-243.
- Baker, M. (2000). Towards a methodology for investigating the style of a literary translator. *Target*, 12 (2), pp. 241-266.
- Bakker, M. & Naaijken, T. (1991). A postscript: Fans of Holmes. In K. van Leuven-Zwart & T. Naaijken (Eds.). *Translation studies: State of the art*. (pp. 193-208). Amsterdam: Rodopi.
- Bakker, M., Koster, C. & van Leuven-Zwart, K. (2009). Shifts. In M. Baker & S. Gabriela (Eds.). *Routledge encyclopedia of translation studies*. (pp. 269-274). London/New York: Routledge.
- Bal, M. (1980). *De theorie van vertellen en verhalen: Inleiding in de Narratologie*. Muiderberg: Coutinho.
- Bassnett, S. (2002). *Translation studies*. London/New York: Routledge.
- Black, M. (1962). *Models and metaphors*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Blum-Kulka, S. (1986/2000). Shifts of cohesion and coherence in translation. In L. Venuti, (Ed.). *The translation studies reader*. (pp. 298-314). London/New York: Routledge.
- Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Chueasuai, P. (2013). Translation shifts in multimodal text: A case of the Thai version of *Cosmopolitan*. *The journal of specialised translation*, 20, pp. 107-121.
- Croft, W. & Cruse, D. (2004). *Cognitive linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cyrus, L. (2006). Building a resource for studying translation shifts. In *Proceedings of the second international conference on linguistic resources and evaluation (LREC-2000)*. Athens, Greece. pp. 1240-1245.
- Cyrus, L. (2009). Old concepts, new ideas: Approaches to translation shifts. *MonTI*, 1, pp. 87-106.
- Genzler, E. (1993/2001). *Contemporary translation theories*. London/New York, Routledge.
- Halverson, S. (2006). Cognitive aspects of translating (and bilingualism). Plenary lecture given at the 9<sup>th</sup> Nordic conference on bilingualism. Joensuu, Finland, 10-11, 2006.
- Halverson, S. (2007). A cognitive linguistic approach to translation shifts. In W. Vandeweghe, S. Vandepitte & M. Van de Velde, (2007). *The study of language and translation*. (pp. 105-121). Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Hermans, T. (1999). *Translation in systems: Descriptive and systemic approaches explained*. Manchester: St. Jerome.
- Holmes, J. (1970). Forms of verse translation and the translation of verse form. In J. Holmes, F. de Haan & A. Popivič (Eds.). *The nature of translation: Essays in the theory and practice of literary translation*. (pp. 91-105). The Hague/Paris: Mouton de Gruyter.
- Holtz-Mänttari, J. (1984). *Translatorisches Handeln: Theory, methodology and didactic application of a model for translation-oriented text analysis*. Amsterdam: Rodopi.
- Hosseini-Maasoum, S. M. (2013). Translation shifts in the Persian translation of a tale of *Two Cities* by Charles Dickens. *Academic journal of interdisciplinary studies*, 2 (1), pp. 391-398.
- Jakobson, R. (1959/2004). On linguistic aspects of translation. In L. Venuti (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition. (pp. 138-143). London/New York: Routledge.
- Kade, O. (1968). *Zufall und Gesetzmäßigkeit in der Übersetzung*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Klaudy, K. (1996). Concretization and generalization of meaning in translation. In M. Thelen & B. Lewandoska-Tomaszczyk (Eds.). *Translation and*

- meaning Part 3. *Proceedings of the Maastricht session of the 2nd international Maastricht-Lódź Duo Colloquium on "Translation and meaning."* Maastricht, The Netherlands, 19-22 April 1995, pp. 141-163.
- Koller, W. (1979/1989). Equivalence in translation theory. translated from the German by A. Chesterman, In A. Chesterman (Ed.). (2004). (pp. 99-104). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1993). The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony (Ed.). *Metaphor and thought*. (pp. 202-251). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar*. Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- Laviosa, S. (2002). *Corpus-based translation studies: Theory, findings, applications*. Amsterdam: Rodopi.
- Leech, G. & Short, M. (1981). *Style in fiction: A linguistic introduction to English fictional prose*. London/New York: Longman.
- Levý, J. (1963/1969). *Umění překladau*. Prague: Československý spisovatel, translated by W. Schamschula (1969). as *Die Literarische Übersetzung: Theorie einer Kunstgattung*. Frankfurt: Athenäum and by P. Corness (2011). as *The art of literary translation*. edited by Z. Jettmarová. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Levý, J. (1963/2011). *The art of translation*. edited by Z. Jettmarová, translated by P. Corness. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Levý, J. (1967/2000). Translation as a decision process. In L. Venuti (Ed.). (2000) *The translation studies reader*. 1st edition. (pp. 148-59). London/New York: Routledge.
- Macken, L. (2007). Analysis of translational correspondence in view of subsentential alignment. In *Proceedings of the METIS-II Workshop on new approaches to machine translation*. Leuven, Belgium.
- Malone, J. (1988). *The science of linguistics in the art of translation: Some tools from linguistics for the analysis and practice of translation*. Albany, NY: SUNY Press.
- Miko, F. (1970). La théorie de l'expression et la traduction. In J. S. Holmes (Ed.). *The nature of translation: Essays on the theory and practice of literary translation*. (pp. 61-77). The Hague/Paris: Mouton de Gruyter.
- Munday, J. (1998). A computer-assisted approach to the analysis of translation shifts. *Meta*, 43 (4), pp. 542-556.
- Munday, J. (2008/2012). *Introduction to translation studies*. London/New York: Routledge.
- Munday, J. (online). Content from previous editions of *Introducing translation studies*. (<http://www.routledge.com/cw/munday-9780415584890/s1/previous/>) 2014年5月1日情報取得.
- Nida, E. (1964). *Toward a science of translation*. Leiden: Brill.
- Nord, C. (1997). *Translating as a purposeful activity: Functionalist approaches explained*. Manchester: St. Jerome.
- Olohan, M. (2004). *Introducing corpora in translation studies*. London/New York: Routledge.
- Osimo, B. (2008). Meaning in translation: A model based on translation shifts. *Linguistica Antverpiensia, New series – Themes in translation studies*, pp. 209-226.
- Palumbo, G. (2009). *Key terms in translation studies*. London/New York: Continuum.
- Popovič, A. (1970). The concept "shift of expression" in translation analysis. In J. S. Holmes (Ed.). *The nature of translation: Essays on the theory and practice of literary translation*. (pp. 78-87). The Hague/Paris: Mouton de Gruyter.
- Popovič, A. (1976). *Dictionary for the analysis of literary translation*. Edmonton: University of Alberta.
- Pym, A., Shlesinger, M. & Jettmarová, Z. (Eds.). (2006). *Sociocultural aspects of translating and interpreting*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Reiß, K. (2000). *Translation criticism: The potentials and limitations*. translated by E. Rhodes. Manchester: St. Jerome; New York: American Bible Society.
- Shih, C. (2012). A corpus-aided study of shifts in English-to-Chinese translation of prepositions. *International journal of English linguistics*, Vol. 2, No. 6, pp. 50-62.

- Sukra, I. N. (2008). The semantic shift of the speech act verbs in the English-Indonesian translation in "The Practical English for Hotel and Restaurant Services" by Dhanny Cyssco. *Ragam Jurnal Pengembangan Humaniora*, 8 (3), pp. 122-129.
- Toury, G. (1980). In search of a theory of translation. Tel Aviv: Porter Institute.
- Toury, G. (1995/2012). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.
- Vandeweghe, W., Vandepitte, S. & Van de Velde, M. (2007). *The study of language and translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- van Leuven-Zwart, K. (1989). Translation and original: Similarities and dissimilarities, I. *Target*, 1(2), pp. 151-81.
- van Leuven-Zwart, K. (1990). Translation and original: Similarities and dissimilarities, II. *Target*, 2(1), pp. 69-95.
- van den Broeck, R. & Lefevere, A. (1979). *Uitnodiging tot de vertaalwetenschap*. Muiderberg: Coutinho.
- 河原清志 (2008). 「ことばの意味の多次元性: "as" の事例分析」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出修士論文 [未出版].
- 河原清志 (2011). 「翻訳語のカセット効果論: 無限更新の意味生成の営み」青山学院大学英文学会 (編) 『青山学院大学英文学思潮』第84巻. 69-88頁.
- 河原清志 (2014). 「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会 (編) 『翻訳研究への招待』第5号. 9-33頁.
- 小山亘 (2005). 「社会と指標の言語: 構造論, 方言論, イデオロギー論の統一場としての史的社會語用論」片桐恭弘・片岡邦好 (編). 『講座社會言語科学第5巻 社会・行動システム』(40-53頁). ひつじ書房.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- 小山亘 (2009). 『記号の思想』三元社.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論』三元社.
- 真島一郎 (編) (2005). 『だれが世界を翻訳するのか: アジア・アフリカの未来から』人文書院.
- メイ, J. (2005). (小山亘・訳). 『批判的社會語用論入門: 社会と文化の言語』三元社. [原著: Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction*. Oxford: Blackwell.]
- マンデイ, J. (2009). (鳥飼玖美子・監訳). 『翻訳学入門』みすず書房. [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies*. London/New York: Routledge.]
- ピム, A. (2010). (武田珂代子・訳). 『翻訳理論の探求』みすず書房. [原著: Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. London/New York: Routledge.]
- 染谷泰正・赤瀬川史朗 (2011). 「大規模翻訳コーパスの構築とその研究および教育上の可能性」日本メディア英語学会第1回年次大会発表レジュメ.
- 田中茂範 (2002). 「『AはBである』をめぐって: 記述文・定義文・隠喩文の基本形式」山田進・菊地康人・榎山洋介 (編) 『日本語: 意味と文法の風景: 国広哲弥教授古稀記念論文集』(15-30頁). ひつじ書房.
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998). 『意味づけ論の展開』紀伊國屋書店.
- 谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社.

巻末表1：認知プロセスと翻訳ソフトの関係

事態構成の操作	シフトタイプ (V&D, vanLeuven-Zwart, Klaudy)	S-universal (暫定的)
I 注意／際立ち		
A. 選択 1. プロファイリング 2. 換喩	modulation (several subtypes)	
B. 範囲 1. 叙述の範囲 2. 探索領域 3. 接近可能性	modulation, adaptation	explicitation?
C. スカラー調整 1. 量 (抽象化) 2. 質 (スキーマ化)	modulation (lexical), Klaudy's generalization / concretization modulation (lexical), plus van	generalization / simplification, explicitation?
D. ダイナミック 1. 虚構的移動 2. 総括的／順次的走査	transposition, modulation	
II 判断／比較 (イメージスキーマ含む)		
A. カテゴリー化 (フレーミング)	(all translation!)	standardization / sanitization, simplification, increasing conventionality, convergence
B. メタファー	modulation	
C. 図／地	transposition / 'interchange'	
III 視点／状況依存性		
A. 観点 1. 視座 2. 方向付け	modulation	
B. ダイクシス 1. 時空間 (空間イメージスキーマ含む) 2. 認識 (共通基盤) 3. 共感	modulation	
C. 主観性／客観性		
IV 構成／ゲシュタルト (他のイメージスキーマ含む)		
A. 構造的スキーマ化 1. 個体化 2. 位相的／幾何学的スキーマ化 3. スケール	transposition? Modulation	
B. フォースダイナミックス		
C. 関係性	transposition	